

特集1 少ない商品、狭い領域でも業績を伸ばし続ける  
「一点集中型」NO.1企業はココが違う

打江製作所が製造しているエッジとは、スキーやスノーボードの板の縁にある金属部品である。このエッジの性能によってターンの精度や滑るスピードが変わってくるため、製造には精密な作業が求められる。平成26年のソチ冬季オリンピックでは、国産のスキー板をばいた日本人選手がメダルを獲得している。この板にも打江製作所が製造したエッジが使われている。

農機具の部品から  
スキーのエッジ製造に転換

明治44（1911）年、日本に初めてスキーが伝来した新潟県上越市。いわばその聖地で打江製作所はスキーとスノーボードのエッジを製造している。従業員10人ながらも国内シェアは100%、海外でもエッジメーカーはほかにオーストリアとフランスに各1社あるだけだ。同社は、日本のスキー産業を支えている使命感から技術力アップに向けて常に努力を続けている。

国内唯一のエッジメーカーとして  
決して「できない」とは言わない

打江製作所

新潟県上越市

り、その依頼でエッジをつくり始めた。現在、二代目社長として会社を営んでいる打江寿和さんは、当時をこう振り返る。「同じ金属部品でも農機具部品とエッジとはつくり方が違う。そこで当時の社長だった私の父が、長野にあるエッジメーカーの工場へ見学に行きました。とはいえず、ライバルになるのですから、簡単に見せてくれるわけがありません。父は農機具メーカーの作業服を借りて、メーカーの人と一緒に工場に行きました。これからスキー

板を生産する予定で、エッジを発注したいから見学させてくれと。悪い言葉でいえば技術を盗みに行ったのですが（笑）、父も職人でしたから、機械や作業を見て、こっそりつくり方を勉強してきたわけです」  
最初は農機具の部品と並行してエッジを製造していたが、50年代にはエッジに特化した。47年の札幌冬季オリンピックをきっかけに日本でスキーブームがさらに進み、スキー板の需要が急激に伸びたためだ。



▲打江製作所社長の打江寿和さん。「よそから見たら、独占企業でいいねと思われるかもしれませんが、実際には唯一のメーカーということで責任も大きい。だから、決して「できない」と言えないんです」



▲打江製作所は昨年度の「がんばる中小企業・小規模事業者300社」の一つにも選ばれている



▲10人の従業員全員が職人として工場内で働いている

社名 株式会社打江製作所  
所在地 新潟県上越市字長面136  
電話 025-523-3400  
代表者 打江寿和 取締役社長  
従業員 10人

特集1  
少ない商品、狭い領域でも  
業績を伸ばし続ける  
「一点集中型」  
NO.1企業は  
ココが違う

一つ分野や自社の技術に徹底的にこだわり、業界No.1を維持し続けている、いわば「一点集中型」の企業がある。今号は、自社製品に絶対の自信を持ち、市場の変化にも負けない企業の視点と新たな戦略に迫った。

